

下商物語 (その四)

多読賞・橋本賞のはなし

本校教諭 林 俊行

毎年、卒業式の前日に全校生徒の前で卒業生に各賞表彰があります。大きく分類すると、校外賞(産業教育関係、保健・体育・文化関係等)と校内賞(皆勤賞、多読賞、体育・文化功労賞等)、同窓会賞(橋本賞)などがあります。所謂、格付けから言うと、産業教育振興中央会会長賞・全国商業高等学校協会理事長賞・全国高等学校定時制通信制教育振興会会長賞から山口県と同賞で次いで校内賞といった順番になると思われま

す。当時の規定では、「毎年四月から翌年の一月末日までに本校図書館の図書を三十冊程度以上を貸し出して読書した者・学級を対象とする」ということで初年度は四名が該当し、賞状・賞品を授与して現在に至ります。筆者が在学中に週に一時間「読書の時間」があり、クラスのみならず万古館(大正四年に儒学者藤沢南岳による「万古休典」の扁額を得たことを機に命名)に向き先生の指導のもとに読書をしたことを思い出します。「読書の手引き」という本校が作成したもので書物に親しむ本校ならではの特色を活かした授業であったと記憶しています。昔から、貴重な書籍を大切に、書庫一杯になったら廃棄せずに新しい建物を建て替えて収容するという教えが引き継がれています。

次に「橋本賞(同窓会賞)」は、昭和二年に本校を卒業された橋本内匠(たくみ)氏が、母校に金額にして一千万円相当の純銀製盾を毎年十名(金・定時)を二十五年間に亘って優秀な卒業生に授与し

て欲しいとの思いから平成十一年度から二十五年間限定として寄贈されたものです。橋本氏は、本校卒業後、満州(現在の中国)に渡り、京城の三國石炭商會に入社され人の何倍も働く持ち前の精神力で、どの配属先でも最高の成績をあげ、入社四年後の二十二歳で釜山支店長に、三十歳で常務となり終戦後に本土に引き揚げられ、当時の徳山市で橋本産業を設立されその後、本社を東京に移され業界屈指の各種エネルギーを取り扱う会社を一代で興されました。昭和二十七年には橋本産業を東京を拠点として我が国を代表するエネルギー産業とされました。橋本氏の座右の銘は、「働楽」で、人より業績をあげるためには人の何倍も働くしかなく、そのためには趣味を持つまいとの信念で偉大な実業家となられました。また、育ててもらった故郷・母校に感謝する心を忘れてはいけないとの思いから、前述したように他界される前に、故郷の光市に三千万円・母校下商に一千万円相当の寄付行為をされました。人徳の高さから、昭和五十四年に勲四等瑞宝賞を受賞されておられます。

参考までに、昔(明治・大正期)の本校での表彰制度は、優等卒業生・善行生・精励賞・学術優等生(各学年で付与)などといったもので、各章は、一等賞から四等賞と分かれていました。また、下関商工会議所会頭賞は、昭和五年から褒状と賞品が優等生に贈られて現在に至っています。同所と本校との歴史的に水く意義深い繋がりを感じます。

驚くことに、答辞は、明治期(明治三十七年まで)は、日本語と英語で、それ以降(大正五年)までは、実に清国(中国)語を加えた三か国語による答辞が行われていたとの記録があります。それらの記録が百年史にも掲載されていますから一度目を通してみて下さい。当時の本校生徒は、下商で習う外国語の授業でどこまで通用するかを試すために市内の高級ホテル(山陽ホテル等)に向いて、実際の外国人客を相手に喋っていたとの記録があります。当時のレベルの高さに驚きますね。



橋本賞